
モンスターハンター ~時の移ろい~

なおとつと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～時の移ろい～

【Nコード】

N1761Y

【作者名】

なおとつと

【あらすじ】

一人の少年ハンターが
一人前のハンターとなるため
たくさんの出会いや狩りを経験する
そしてその先には…

プロローグ 王者の雷光

小さな台車が狭い山道を進んでいた

山の斜面を切り崩して作った切り通しで
大きな台車がひとつ通るのが精いっぱいだ

「がぐあ、があああ」

前方で大きなアヒルのような丸い鳥が台車を引っ張っている

おとなしい鳥竜種のモンスターでガーグアと呼ばれている
荷物を運ばせたり、羽から服を作ったりしている

そして荷台で一人の少年が退屈そうにのっていた

「ああああ、退屈だあ」

彼の名前はジキト

ドンドルマの街からやってきた新米ハンターである

長めの黒髪を後ろで無造作に束ねている

防具は頭は何も装備せず

レザーライトメールに

腕と足にはチェーンシ리즈そしてアイアンベルト

比較的手に入りやすい素材で作られた防具だ

そして腰には鉄鉱石で鍛えられた
片手剣のハンターカリングが携えてある

「にしても、すごい雨だな…」

激しい雨が荷台に乗っているジキトを打ちつける

山道には霧がかかっていてなかなか視界が晴れない

ガーグアが黙々と歩いていると

いきなり隣の木に暗雲を突き破り雷が落ちた

「がくあああ！?!？」

驚いたガーグアは大きくバランスを崩した

「う、おおおおお?!？」

ジキトは大きく揺れる荷台から振り落とされないように
必死にしがみつく

しかし台車は大きく転倒して
ジキトは放り出された

「ぐわああッ!?!？」

雨でぬかるんだ地面を滑る

そのまま木に激突した

ガツン

「痛つつつ…」

痛い体を起こすと

近くの木にまた雷が落ちた

ズシアアアアン

「一体どうなってるんだ…」

いたるところに落ちる雷

空気が静電気を帯びて

パチパチと音を立てる

「アウオオオオオン！」

山の上から大きな雄叫びが聞こえる

そちらをに向き直る

そこには

電気をまとった

狼がいた

それはとても大きく

頭には二本の角があり

足には大きく横に飛び出た鉤爪がある

雨で薄暗いなか
それは青白く
強く光を放っていた

荒々しくも
優雅な印象を与えるそれは
まるで雷そのものようだった

「あいつは……」

ドンドルマの街にあんなモンスターの情報は入ってきていない
全身に鳥肌が立つ

そのモンスターは常識に収まるようなものではなかったからだ

「……すげえ……」

ジキトは好奇心に駆られてそのモンスターをしばらく見ていた
それはしばらく空を見上げていたが不意にこちらに目を向ける
びくつとしてジキトは体が固まってしまった

するとそれはジキトに向かってだんだん歩み寄ってきた

ジキトは目をそらそうとしたが
無理だった

まるで蛇に睨まれた蛙のように
その場から動けなかった

それはまるで品定めをするような目で
こちらをにらんでくる

その深い蒼い色の目が急に殺気を帯びた

「グギユアアア！」

それは大きく前足を振りかぶる

ジキトは

はっとして

目の前に盾を構えた

それは振りかぶった前足でジキトをひっ搔いてきた

しかし片手剣の盾は気休め程度の小さなものなので
すべての衝撃を抑えることは無理である

案の定、盾で攻撃を防ぐも

衝撃を抑えきれず後ろに大きく吹っ飛ぶ

しかもここは狭い山道

後ろが崖になっている

「う、うわああああー!!」

雨の降る深い森へジキトは飲み込まれていった

プロローグ 王者の雷光（後書き）

こんにちは、なおとつとデス

こんかいは新小説

「モンスターハンター 時の移ろい」
を始めました

中身は主に3rdを中心に書いていく予定です

また、かなり更新がマイペースなので遅いかもしれませんが
誤字脱字や文法間違いが多いとは思われますが
よろしく願います

狡猾な狗竜の長 前編（前書き）

遅くなって誠に申し訳ありません

モンスターハンター〜時の移ろい〜の続編です

それではどうぞ！

狡猾な狗竜の長 前編

体中の痛みでジキトは目を覚ました

「いつつ…」

体を起こし周りを見渡す

どれほど寝ていたのだろうか
空には月が輝いている

周りには荷台の破片であろう
砕けた木切れが散乱している

風が吹いて上から紅くなった葉が
月光を浴びてひらひらと体に舞い降りてくる

「…とりあえずここから、動くか」

ジキトは痛い体を何とか起こして
腰のポーチを漁りだした

「…何を入れてたっけ」

ざらざらとポーチを逆さまにして
中身をすべて出す

中からは砥石や携帯食料、ペイントボール等が出できた
その時ガシャンと音を立てて

回復薬を詰めたビンが地面に落ちてしまった

「あああああ！！回復薬が…」

がっくりと肩を落とすジキト

「…仕方ないか」

ほかにも壊れた荷台に積んであったと思われる
投げナイフや爆弾などを念のためポーチに詰め
その場を後にした

ジキトは流れ者のハンターだ

ハンターには色々な種類に人がいる
街を拠点として活動するハンターや

ジキトのように拠点を持たずに
報酬の良い仕事を目当てにいろんなところを回るハンターもいる

ジキトは見習いハンターを卒業したばかりで

ドンドルマの街から修行も兼ねて

この地方にやってきていた

だが未知のモンスターの襲撃を受け
移動用の荷台が壊されてしまった

「近くに街か村がないかな…」

自分の居場所も把握しきれずに森の中を歩く

すると水の流れる音が聞こえてきた

その音を頼りに歩いて行くと
開けた場所に出た

大きな滝が目の前に現れる
そこから落ちる大量の水が
浅い川に広がっていく

川は深さはちょうどくるぶしくらいまでで
歩いて向こう岸まで渡れるようになってる

ジキトのいる岸の反対側に
ジャギイと呼ばれる鳥竜種のモンスターがいた
ピンクに近い紫と橙色の鱗
大きなエリマキが特徴である

ジャギイにはオスの個体とメスの個体で姿が違う
メスにはエリマキがないが
体の大きさがオスより一回り大きい
名前も、ジャギイノスと別の名前で呼ばれている

鳥竜種のモンスターはかなり縄張り意識が強く
ジャギイがよく縄張り内を巡回している

無駄な戦闘を避けたいジキトとしては
あまり遭遇したくないモンスターだった

そろりそろりと足音を忍ばせて

細い道へ行くこうとしたとき

「グウウガアアア」

と一際大きな雄叫びが滝の方から聞こえた
ジキトは反射的に振り返る

滝の水がごうごうと流れ落ちている
その水のカーテンを突き破って
モンスターが出できたのだった

それのみてくれはジャギイとほぼ同じだ
だが大きさは断然大きく
爪や牙も圧倒的に鋭利で大きかった

狗竜の長と呼ばれる存在
ドスジャギイ

黄色い、とても野性的な目をしていて
体にはいくつかの傷がある

ドスジャギイの目がジキトを捉えた

「グギャアア！！グギャアア！！」

上を向き大きく威嚇の咆哮をした

すると後ろからジャギイの群れが現れる

「なんで増えるんだよお！！」

ジキトはドスジャギイに背を向け逃げ出した

しかし目の前にジャギイが二匹飛び出し
ジキトの行く手を阻んだ

「…邪魔だ!」

腰から勢いよくハンターナイフを引き抜き

目の前のジャギイ飛びかかり

そのまま鱗を切り裂く

「ギャッ」

短い悲鳴を上げのけ反るジャギイ

隙ができたジャギイの横をすばやく前転ですり抜ける

「喰らえ!」

さらに身を翻して

ポーチの中から投げナイフを取り出し投擲した、が

ドスジャギイは大きく尾を振ってナイフをはじき落とした

「グウウ…」

ドスジャギイに命令されて動いているのだろうか

ジャギイ達はジキトを囲んで

じりじりと牽制してくる

「くそっ！」

闇雲に剣を振り回すが
逆にジャギイ達に翻弄させられる

体力を削られ息が荒くなってくる
ハンターといえども所詮は人間だ
連続で攻撃を繰り返すと必ず隙ができてしまう

ジキトの一連の攻撃が止まるか止まらないかの瞬間
ドスジャギイが大きく身を沈める
そして大きく飛びあがり
弧を描きジキトに襲いかかった

ジキトは攻撃後の隙を付かれ交わすことができず
とっさに目の前に盾を構えた

ドスジャギイがつつ込んできた衝撃が左腕に直接伝わった

「ッ！」

はじかれるような形で大きく後ろにのけ反るジキト

ドスジャギイはさらに追撃をしようと
体の側面をジキトに向け、横っ跳びの要領で体当たりをしてきた

これも盾で防ごうとしたが
左腕が完全にしびれて、いうことを聞かない

ジキトは構えも取れないまま

ドスジャギイに吹っ飛ばされた

3メートルほど飛ばされ

背中から強く地面に叩きつけられ

肺の中の空気が押し出される

「がっ…はっ…」

目の前がチカチカする

ジキトは意識が飛びかけたが

何とか耐え、ゆっくりと起き上がるうとした

しかし、謎のモンスターに負わされたダメージもあり

防具の下の体は、節々が悲鳴を上げていて、起き上がることもすらない

ドスジャギイがこちらに迫ってきた

「…!」

右腕を使い

地面を這いつくばり逃げようとする

「グギユオオオ?!」

すると、後ろから雄叫びでは無いドスジャギイの鳴き声が聞こえた
不思議に思いジキトが振り向く

ドスジャギイはジキトではなく

全く違う方向を向いていた

ドスジャギイの見ている方向には
一人のハンターがいた

腰にライトボウガンと呼ばれる狩猟銃を構えている

防具はルドロスシリーズ

水棲獣と呼ばれるモンスターの素材と昆虫の堅い甲殻が
ふんだんに使われてる

顔はスコープを覗いていてよく見えない

ハンターの持つライトボウガンの先端が火を噴く

放たれた弾丸は正確にドスジャギイの横腹を撃ち抜く

しかしドスジャギイはひるむ様子はなく

そのハンターめがけて走りだした

「……………」

無言のままその場から動かないハンター

ドスジャギイがその場で足に力をこめて

そのハンターに飛びかかる

「あぶなっ…！」

ジキトが叫びかけたその時

ハンターがすばやく後ろにバックステップした

「ゲギヤアア！」

ドスジャギイは地面に鉤爪を立て
ハンターとの距離を詰めようとしたとき
足元で何かが爆ぜた

その瞬間

ドスジャギイは体全体を激しく痙攣させ
その場から動けなくなっていた

ハンターが叫ぶ

「ゼロさん！レックスさん！今です！！！」

すると風を切る音と共に

一本の矢がドスジャギイの首周りのエリマキを貫いた

加えて雨のような数の矢が降りかかる

「ギユオオオ……！！！」

突然の矢の雨と畏で身動きが取れず呻くドスジャギイ

そして滝の上から二人の人影が飛び出す

大きな地響きをたてて

大男と女が降りてきた

「おう！シモン！今回の獲物はソイツかあ？！」

大男の方がボウガンを持つハンターに話しかける
防具はドラグライト鉱石やシールライト鉱石などの
希少な鉱石をおおく使われているインゴットシリーズ
中世の鎧を思わせるデザインだ

背中にはチェーンブレードという

大きな電動ノコギリのような太刀を担いでいる

シモンと呼ばれた少年が答える

「はい、ドスジャギイです！」

「わかったあ！燃えてきたぜえええ！！！」

「……レックス、シモン、そろそろよ」

弓を構えた女が二人に注意を促す

このハンターがゼロのようだ

防具は黒い角竜の装備

ディアブロウシリーズ

両肩に飾られている大きな二本の角が特徴的である

弓はブロスホーン？

これも二本の角竜の角をベースに作られている

シモンとレックスに檄を飛ばした直後

ドスジャギイが畏を抜け出した

「グギヤアアアア！！！」

かなり頭にきているのだろうか
口の端から息が荒く溢れている

「私とシモンで後方から支援するから
レックスに前衛を任せるわね」

そう言いながらゼロはポーチの中からピンを取り出し
弓の先に取り付ける

「了解です、ゼロさん」

シモンもライトボウガンに弾丸を込める

「よおし、任せる！」

レックスも背中中の太刀を抜く

ジキトは言葉を発せずその三人を見ている中

三人が武器を構え

ドスジャギイにむかって走っていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1761y/>

モンスターハンター ~時の移ろい~

2011年12月4日01時51分発行